

---

# 狐の面は月見て笑う

柚葉

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

「」のPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

狐の面は月見て笑う

### 【著者名】

Z3360Z

### 【作者名】

柚葉

### 【あらすじ】

義賊：金持ちから金品などを盗み、貧民に与える賊。

義賊グループ「月夜」に所属する冰美は自分と紅い色が嫌いだった。理由は、戦うとやりすぎてしまつから。やりすぎたときの色が、紅だから……

少し血の表現がありますので「」注意を。

\* 連載始めました。冷やし中華っぽい言い方ですね……

## プロローグ

氷美<sup>ひみ</sup>は狐の面の下で笑つた。

月光が降り注ぐ中、紅く染まつた刀を振つて。

紅葉色の地に、花のような紋が入つてゐる着物。刀のよう<sup>。</sup>に紅く染まつたのが目立たないよう<sup>。</sup>に。

でも氷美は、この着物が好きではなかつた。  
なぜか。

やりすぎてしまつたことを自覚させる色。

氷美の嫌いな、紅。

知らない人は「殺人鬼」と。

知つてゐる人は「義賊」と。

氷美たちは、そう言われる。

氷美は、やりすぎてしまつから。手加減ができないから。

氷美は、紅く染まつてしまつのだ。

そして、氷美は。

紅く染まつた自分の顔を見たくないからこそ、狐の面をかぶる。

恐れられることを恐れてゐるから、やりすぎてしまつ。

どうすればいいのかわからないから、操り人形のように、刀を振るうのだ。

? · 制御?

氷美は義賊。

(義賊：金持ちから金品を盗んで貧民に与える賊。)

だが、氷美は単独で義賊の活動をしているわけではない。  
5人のグループ、「月夜」。

「あーあ、派手にやつたな、氷美。」

氷美の背よりも50?ほど高い塙を軽々と越えて来たジャージ姿の少年が苦笑した。

「…零。」

零と呼ばれた少年も、「月夜」の一人。

氷美よりも一歳だけ年上で、それだけなのに威張るというのがものすごくいらっしゃつた。

「氷美もさ、やりすぎないよ!」にできないわけ?」

「できたら、とっくの昔にやつてるわよ…。」

喋るのは久しぶりな気がした。日本刀を使っているときは、時間が長く感じられるのだ。

感じられるだけじゃないのかもしれないけれど、もう慣れた。

「どうでもいいけど、零。」

「あい?」

「私がやりすぎるのを、黙つてみていたといつの?」

氷美は、自分がやりすぎる」と、誰かに止められないと相手の息の根が止まるまで戦うことを知っている。

もちろん零も、知っているはずなのに。

「あ、いやー…それは、た…。」

「黙つてみてたんでしょう?」

やりすぎてしまう自分が、大嫌いだった。

だからやりすぎたときはとめてくれと、月夜の全員に言った。

「……悪い。」

ややあつて、零が頭を下げた。彼曰く、氷美のやりすぎたときの強さがとめるほどのものなのか品定めしたらしい。

「…………」

「……氷美？」

「ふつざけんじやないわよー。」

「ちょ、氷美！仕事！騒ぐとばれるー。」

「あんたが悪いのよ、零。」

「だから、悪かつたつて！」

「悪かつたですむ話じやないのよバカー。」

「じゃあどうしろつてんだよー。」

「そんなの私が知るわけないでしょー。」

「私、帰る。零一人でやつて。」

「え、ちょ、氷美！？」

零が後ろで呼び止める声がする。

知つたことか。あいつが悪いんだ。そう腹立ち紛れに思う。

氷美は日本刀を持ち、いつの間にか落としていた狐の面を拾つ。

「少し、汚れた……。」

自分で言つて、吐き気がした。

その紅い汚れは、氷美がやりすぎてしまつた証拠となる。

氷美は、どこで道を間違えたのか。

あの、孤児だつた頃から間違えてたというのならば。

氷美は一つため息をつき、知つたことか、と心の中でもう一度呟いた。

少し腹が立つたまま、氷美は門の出口へと向かう。

悔しいが、零のように塀を飛び越える」とはできないのだ。  
仕事は明日実行することになる。

「…や、氷美つて…」

後ろからまだ零の声が聞こえる。

「待てつつつてんじやん…」

しつこいなあと氷美は思った。自分のせいだから必死で追いつけよ。

「いのつ……やりすぎ女…」

ぶちつ

「好きでやりすぎてるわけじゃねーよ…」

やりすぎ女だと?

こつちだつてやりすぎて後悔してくるんだよその後悔のネタを一つ増やしたのもお前が原因だらうがそれなのにお前がそう言つてはいけないといふ権利があるのか!?

「や、だつてお前がとまんねーんじやん!」

「お前と話す気ないんだよ。あんた一人で仕事やれば?は、どうせ私はやりすぎますよ、やりすぎるのは不要ですと?じやあおまえ一人でやつてみればいいじゃん。ちゃんとできるんならね…」

「いや、そこまで言つてないんだけど。」

「私にとつてはそれと同じなんだよ…」

零は落ち着きまくつている。それがまたいらつべ。やつやつて零とのケンカに氷美は集中しそうだ。

「…誰が、いるの…?」

？・制御？

零と氷美とで取つ組み合つた状態のまま、おそれおそれ声がした方を見た。

「そこにいるの、だれ…？」

6歳ぐらいの、少女。

「…零！」

「おい！なぜそこで俺に矛先が向くんだよ！？」

「もとをたどればあんたのせいじゃないのよー！」

2人は心なしか顔が青い。

そりや そうだ。

義賊なのに完全に見られたとなれば失格。

しかもさらには、それは自分たちのケンカのせいとか言つたらもう終わり。

義賊グループ「月夜」の名折れ……。

「ど、泥棒！？」

彼女の声が恐れのせいで小さいことが幸いだった。

だが。

「泥棒なんでしょう、家のお金は、盗んじゃダメよー！」

そう言うなり、足下に落ちていた木の枝を拾つて闇雲に振り回しながら襲いかかつて（？）きた。

「出でいってよー！」

「な

急にそんなことをされると思つていなかつた氷美は、避けるのが遅れた。

「やああつ！」

少女が叫び、振り下ろした枝が、氷美の頬をかすめる。

「つづ……」

鋭い痛みが走り、そこから血があふれた。

小さい傷だったが、氷見の目に映つたのは

嫌いな、紅。

だめだ  
また、やりすぎてしまつ。

氷美は無言で日本刀を抜いた。

やばい。

零は直感でそう判断する。

とめなければ…………！

「なん、だよ……！」

足うごかねえし。怖いのかよ！

「零」

氷美が、静かに呼ぶ。

さつき零とケンカしていたときの声とはぜんぜん違っていた。

「邪魔、しないで。」

冷ややかな声。背筋が凍るような。

氷美を傷つけた少女は、その様子を見てふるえていた。  
木の棒を手が白くなるほど強く握り締めて。

「あ…あ、」

声にならない声を出していた。

そりや怖いよなあ、と零は冷静に分析してしまつ。

だつて、俺だつて怖いもん。

「氷美、今度こそ止めねえと俺殺されるよな…。」

俺、まだ死にたくねえよ？

零の思考がそこまで達したとき、氷美が日本刀を構えて走り出した！

「うげっ」

零は慌てて追いかける。

氷美は、やりすぎたことをひどく根に持ち、下手したら自分の命を差し出してでも罪を償おうとする。

当たり前といつちや当たり前のことだが、こんな幼い少女を。  
自分の体験したことさせるとなれば。

氷美は

「やめろっ、氷美！」

零は、追いつけなかつた。

紅い、血が、舞う。

零はそれを見たくなくて、固く刃をつぶつた。

だけど。

血が舞う音の変わりに。

きい ん

と、金属音がした。

「……氷美？」

おそるおそる刃を開けると。

長身の人が素手で氷美の刀を押さえている。

それを片手ですませ、もう片方の手で速やかに少女の首に手刀をたたき込んだ。

黒の「コード」に、首の後ろで結わえた夜空色の髪が揺れる。

「……なつ、朔さん！？」

その人は糸目を面白そうにわざわざ細めて言つた。

「零くん？とめなかつたのなら、お仕置きだよ？」

「ウソだろ……。」

この朔という青年、「月夜」のリーダーであった。

「さ、朔さん？お仕置きつて何するんすか。」

零は死にたくないという思いが強まつたあまり、氷美のことを放つてそのことを聞く。

氣を失つた少女を木陰に置くと、朔は困つたように眉を寄せた。

「君ね、もう少し氷美のことを考えてあげないの？」

「…ふつ、死にたくないのは誰でも当たり前でしょ。」

無意味にカツコつけてみる。

ちなみに、朔はまだ氷美の剣を押さえつけている状態。

その状態でよく話せるなあと心の片隅で思つたのはおないとくとして。

「…氷美、どうするんですか？」

「ん、どうするつて？」

さつきから氷美は動かない。

朔を睨みつけているように見えるが、いつもの氷美ならそんなことしないし。

やりすぎる状態では自分を失つてゐる…そんな感じだと零は勝手に予想した。

「剣そのままじゃないすか。」

「ああ、それ？氣を失わせた方がいいかねえ？」

知るか。

なんか朔のこいつこいつ態度がいらつぐ。

零は自分の指が無意識に動いてしまつたのを見ないことにした。

零は鋼糸（糸型の剣みたいなもの）を使って戦う。

右手の中指が動くのは、本気になつた零が「片づけ」をするときの仕草。

いや、今動いたのは左の中指。

だつたら大丈夫だ。それに今は鋼糸を身につけていない。

身につけていたところで朔を倒せるわけでもないが。

「あ、零くん。今僕に殺氣をむけたね？」

だつてこの人は、どんなにうすい殺氣でも気付いてしまつ。

「氣のせいでしょう。」

「君が言つた氣のせいが本当に氣のせいであつたことがないけどね。」

長くて理解しにくいやつだつたから、零は聞き流した。

「じゃ、ごめんね？氷美。」

朔は剣をむけてくる氷美の鳩尾に拳を入れた。  
かわいい。

たぶんこれは、朔のお仕置きである。

いつもなら朔は首筋に手刀をたたき込むだけで氣を失わせるが。  
鳩尾なら、痛みとか…たまに吐き気を感じたりもする。  
え、じゃあ俺つてもつとひどいお仕置きをせられるの？

やばい。

考えただけで氣が遠くなつた。

「零くん？」

「…はい。」

朔は何を考えてるのかなあとこいつ笑顔で聞いてくる。

表情がわかりやすくて怖い。

「いーえ、なんでもないです！」

「じゃ、こここの仕事は近いうちにやるところとします。」

「は？え、なに、帰るんすか。」

「当たり前。君も氷美も、しつけ直したほうが良さそうだしね？」

零は無言で朔の後に続いた。

こいつこいつがあるから、この人は月夜のリーダーになれたんだと思つ。

月夜の人達が暮らしている所は、築五十年のぼろいアパートだった。もう誰も使つていない、廃墟のようなものだ。

「あれ、他の2人はどこいったんすか?」

不思議に思った零が朔に聞く。無視されたが。狭い部屋の中に、人がいる気配がしない。

零は首を傾げてふと上を向き

「うわあっ!?」

思わず鋼糸を「天井に張り付いていた人」の首に巻き付けようとした。

力任せに糸を引っ張る。

「あつぶないわね～…その変な反射神経ビリビリかしなさいよ。

しかし、鋼糸には何もかかっておらず、零の隣に小柄な少女が降り立つた。

「変なつてなんだよ、まつたく…。なんで天井に張り付いてんだよ、  
萌黄。」

萌黄と呼ばれた少女は、なぜか偉そうに胸を張る。

「ふんつ、誰か来た気配がしたから隙があつたら後ろから襲おうと思つたのよ!」

天井にいたら、後ろといつより上だと思つた。

それに、足震えてんじやん。

彼女は年齢不詳だが、見た目は十歳程度。

怖かったんじやねえのかなあと見てみるが、言つのはよしておいた。

短気だから、抹殺されかねない。

「おや萌黄。起きていたのかい?」

「ふざけないで朔。私がねるわけないでしょ……ふあ……」

あぐびでてんじやん。

萌黄は、朔を呼び捨てにでき、タメ口で話せるといつある意味超人であつた。

「で、零。あなたはうちの氷美に何をしたのかしら？」

急に凄みのある笑顔が迫ってきた。

「えや、なにも？」

「うん、俺は何もしていない。

鳩尾に拳をたたき込んだのは朔だ。

「…………あつそ。」

納得したのかよくわからない萌黄の反応。

後で朔がやつたとばらそつか。

そう考えた零だったが、その「ばらした後」のことを考えて冷や汗をかいだ。

きっと、朔に半殺しにされるに違いない！

賭けてもいい。絶対当たるから。

「氷美…………かわいそうに。早く目覚めてね……？」

萌黄が気を失っている氷美に顔を近づける。

「何する気だテメ！」

「！？」

<sup>プラス</sup><sub>+</sub>、彼女はレズビアン つまり、同姓に好意を抱くのであつた。

「うるさいわね……私と氷美の仲を邪魔しないでちようだい。」

「うるせーよ！なんでよりにもよって氷美！？」

「氷美は日本刀を持つ戦う美少女よ。可愛すぎるわー！」

「あんた何歳だよ！？」

零と萌黄の口論が続く中、朔がぼんやりと呟いた。

「零くんは、氷美が好きなんだっけ？」

「…………は？」

啞然とした零に追い打ちをかけるように萌黄が騒ぐ。

「きやー図星だ！かつわいいーでも氷美はあげないわよ？」

「意味わかんねーしー朔さん、そういうこというのマジでやめてく

ださい！」

はははと朔が頬をかく。  
せつてえおもしろがつてやがる。

「…私がどうしたつて？」

騒ぎすぎていた。

さすがにじるさかつたようだ。  
氷美が、田覚めた。

## ？・制御？

「朔さん。」

氷美は起きてすぐに、朔に伝えたいことを言おうとした。  
だが、肩が重い。

「萌黄…。」

なぜかというと、萌黄が寄りかかっているからである。  
「なんだ、氷美？」

にこにこ笑顔で萌黄が聞いてきた。

彼女に好かれているようで、氷美にとつては妹ができたみたいだ。  
「今は大切な話があるから待つててね？」

苦笑を浮かべて萌黄に訴える。

「…氷美は私を何歳だと思つていてるんだ…？」

ぶつぶつ言いつつ、萌黄は氷美的肩から離れた。  
「で、なんだい？」

朔が氷美に問いかける。

危ない。忘れるところだった。

言いにくいくこと…大きく息を吸い込む。

「…言わないよね？」

朔が、氷美の心をのぞいたかのように言つた。  
はつと顔を上げると、朔の糸目が普通の人のように開いている。  
なんというか…似合わない。

「まさか引退したいなんて、言わないよね？」というか、君に言える  
ことじゃないと思つんだけど。」

朔はそう続けた。

ばれている。私の考え方なんて。

「…でも、ダメなんです。」

氷美は小さく返した。

私じゃダメなんだ。やりすぎてしまつ私じゃ、月夜のバランスがと

れない。

零の鋼糸だつて、糸型だが刃の部分とみねの部分とがあり、本気にならないと刃の部分を使わない。

だから、彼は人を殺すことが滅多にないのだ。

萌黄は薬を使う。

睡眠薬、身体が麻痺する薬…すべて自分で開発していた。もしもの事態ということは、ない…………はずだ。

朔は体術、もう一人は極度の引きこもりで情報屋。人を殺してしまうのは、氷美だけなのだ。

その氷美だけのせいで、月夜全体が悪く言われる。

そんなの、他の四人に悪いだろう。

だから、氷美は。

「…………… さい。」

「ん？」

小さくて聞こえなかつたように見せかけているが、朔は凄みがあり、少し寂しげな笑顔を浮かべている。

わかっているだろうに。

私はダメなんだと。

義賊にはなれないのだと。

ずっと成りゆきを見ていた零と萌黄がまさかと目を瞠る。

「月夜を、やめさせてください。」

仕方ない。

やりすぎてしまつのは、制御できないんだ。

？・秘密、過去？

「…やつぱり、やうなのかい？」

朔は困ったように眉をひそめた。

その視線を受けきれなくて、氷美はうつむく。

「…仕方ないじゃないですか…」

私がいるせいで、月夜はダメになってしまふんだし。

「氷美…私が嫌いか？」

萌黄が泣きそうな声を上げる。

「いや、そういう問題じやないんだけど。」

萌黄は好きだ。

年下なんだか年上なんだかわからない態度が可愛らしく。「じゃあなんでやめるとか聞こ出すんだよ…」

一番反応が遅かつた零。

一番反応が遅かつたけれど、一番焦つている気がする。「やつすぎてしまつのは、悪いことじやないんだよ～氷美。」

朔が優しく諭した。

でも、悪いことじやないというならばなんだといふんだ。

「悪いことです。だつて私がいたら、月夜が悪く言われる…

「そんなの気にしなければいい！」

零が怒つたように叫んだ。

「零…」

「月夜が悪く言われようと、氷美は悪くねえだろ！～悪いのは不浄の金を使つてる相手なんだし…」

確かに、零は間違つたことは言つていない。

萌黄も隣で頷いている。

でも、それじやあ氷美の気持ちが収まらない。

「でもさ、零。」

「なんだよ？」

「私は、みんなに迷惑をかけると思つんだわ。」「はあ！？ そんなの、」

「どうでも良くないんだよ、私には。」

零の言葉を遮るように、氷美は強い口調で言った。

零が黙りこくつて、誰もひと言も発さない。

気まずい沈黙が流れる中、ピピピピッヒと緊張感のない音が響いた。

「おつと、鴉からメールだ。」

朔が銀色の味気ない携帯を開き、うすく笑つた。

「あそここの屋敷の人に気付かれた。警備を厳重にするらしいって。」「あそこって…さっきの。」

零が思い出すように呴く。

朔は頷き、チラリと氷美に目をやりながら話した。

「でも氷美はこうなつてるし、君たち2人で行つてくれるかい？」

2人といわれた萌黄、零は顔を見合わせる。

勝負を挑むかのように笑い合つと、立ち上がつた。

「行くぞ、萌黄。」

「ふんつ、私が戦いに出るのは、まことに久しぶりだな。」「いつてらつしゃい。」

朔がにこやかに送り出し、2人は窓から飛び降りて屋敷に向かつた。話について行けずについた氷美は、ぼんやりと思つたことを聞いてみた。

「鴉さんつて…性別、どっちです？」

そんな氷美に朔は、相変わらず笑つたまま答えた。

「うん、不明だよね。」

リーダーが知らぬのならば、知る人はいないだろう。

ちなみに鴉は極度の引きこもりで、戦うことはしない月夜の情報屋であった。

？・秘密、過去？のオマケかもしれない。

「夜分遅くにすみません。」

玄関の方で、手はず通りにセリフを言つて萌黄の声が聞こえる。  
月夜の中では姉さんの存在なのに、こいつ風に言つているとおし  
とやかなお嬢様に思えるから不思議だ。

「ん、なんだお前は。」

門番らしい声。

すると萌黄はオドオドしたように言つ。

「あの、ここの方に用事があつてきましたのですが…。」

「…今夜はお嬢様が特に怯えていらっしゃるんだ。ご主人様も相手  
にしてくれないだろ？」

門番は少し毒氣を抜かれたようだつたが、萌黄のことをかたくなに  
拒む。

零は木の上からその様子を見ているのだが、萌黄の変化がよおつく  
わかつた。

「ちつ、めんどくさい奴め。貴重な薬剤をこんな序盤で使わせるな。

」  
低い声でそういうと、手のひらサイズ（萌黄の手のひらだから結構  
小さい）の小瓶を取り出し、振りました。

：振りました？

えつ、もしかして俺被害者？

振りまくとか危なさ過ぎる。

慌てて袖で口元を覆つた。

萌黄は、そのままだが。

：ふう。

萌黄がため息をつき、門番が倒れる。

それからきつかり30秒数えて、零は口元から手を離した。

萌黄はそんな零を見、鼻で笑つた。

「ふんつ、じれぐりいの睡眠薬、なれておかねば私と共に闘などできんぞ? 零。」

「…………や、萌黄。お前大丈夫なん?」

「……お前、馬鹿なのか? 薬を扱うものが少量の薬で氣を失つて死つする。」

「……少量なんだ。」

零は返す言葉が見つからなくなり、沈黙した。

「とにかく零。」

「あ?」

「中で、どうするつもりだ?」

「……氣を失わせりやいいだる。」

「鋼糸でできるのか?」

「峰の方で縛ればいいんじやね?」

「氣を失いはしないだろ?」

「そこはお前に任せせる。」

「そこいら辺が、萌黄といて便利なところだと思つ。」

「自分勝手だな、零。」

「無理なもんは無理なんだよつ。」

あ、今思い出した。

騒いだらまた見つかるし。

てか、朔さん警備を厳重にしたとか言つてなかつたつけて

「おーーー今こっちで声がしたぞーーー」

「チームF、標的を確認した。」

見知らぬ（当たり前）おじさんたちの声が飛び交う。  
しかもなんか連絡取り合つてねえ?

「逃げるぞ萌黄!」

「は? 仕事はどうするつもりだ零!ー?」

「いいからー見つかるよつやマシだろー?」

意味なし。

逃げるときも騒ぎながらだし。

もしかしたら氷美のときよりもやばいかもしないなーなんて。

「零ー口と鼻と耳をふさげー！」

口と鼻と耳ー？

「無理だろ馬鹿！俺の手は一本だー！」

「ひつちじやねえかー？」

「逃げ足の速い奴らめー！」

警備員の人達とおいかげつこの始まり。

後ろでさらに萌黄がいろいろと喋つてるので、ばれやすくなつた。

零がツツ「ミミをいちいちするせいかもしけないが、そこは零の性格なので仕方ない。

後日。

『体力のつけたい方、おすすめです！』

なーんて見出しであるサイトの記事となつた。

走り回る零たちの姿が、黒く影になつて映つていたりして。

その記事を作つた人は、黒い鳥の名を持つあの人だつた。

？・秘密、過去？

ほんとは、辞めるなんて嫌だ。  
氷美はくちびるをかみしめた。

そもそも氷美は孤児で、拾つてくれたのが月夜だったんだし。  
辞めるなんて言つたら、氷美はまた一人になる。  
自分の気持ちなんて、我慢しなければいけないことだ。  
月夜は、私がいると仕事がちゃんとできなくなる。  
しつこいようだが、氷美はそれが嫌で仕方なかつた。

「氷美。何時までも自分で悩むなよ？」

朔が言う。

「だけど、たとえ打ち明けたからといって、やりすぎがなある訳じ  
やないんですし。」

「……ひねくれてんだね、君。」

「……は。」

自嘲気味な笑みを浮かべた氷美は、脇に置いてあつた日本刀  
氷美の愛刀・雪鶴を朔に差し出した。

「…氷美？」

「これ、もとは朔さんのものですよね。」

「まあ、ねえ。」

「…お返しします。私には、これを握る権利がないので。」

氷美はそう言つて朔を見上げた。

長身な彼には、座つても見上げなければ顔が見えないときがあ  
る。

「……困つた奴だね、雪鶴。」

朔は氷美にではなく、雪鶴に話しかけた。

「そう、そなんだよ雪鶴！わかつてくれると思つてた！  
え？や、まさか！厄介者だなんて思つてないよ？雪鶴は綺麗だから  
ねー…」

朔はそのまま雪鶴と話しているかのように喋る。

なんか朔が冷や汗をかいているように見えるのは気のせい?  
「具現化すればいいの。」めんどくさいことか言わずにやれ。…ね? 雪

鶴?」

氷美はめまいがした。

朔が変人に見えて仕方ない。

「…えーっと、朔さん? 雪鶴… どうしたんですか?」

『どうしようも何もあるか。 我が話しているのが聞こえぬか?』

ふと、なんか声が聞こえた。

「……………。」

『そなた、我がずっとパートナーとしていたのに話していたのを知らぬのか!?』

「……………朔さん?」

氷美はのろのろと顔を上げた。

「うん、雪鶴だよ?」

にこやかに頷く朔。

刀って、動物だつただろうか。

『むう… 今は聞こえていいよ! じやが、私は無視されてるのか?』

朔。』

雪鶴(?)が朔に話しかける。

朔は少しも動搖せず、雪鶴と会話していたといつのか?

「いや、まだちゃんと事態が飲み込めていないだけだよ。」

『そうか。なら良かつたが… 氷美は、我をなんだと思っていたのじや?..』

少し憤慨したように言つ雪鶴。

氷美はそれについて即答した。

「日本刀。」

『…ま、間違つてはいないのじやが… 即答されると少し傷つくな。』

ふむ。』

落ち着いて聞いてみると、雪鶴の声はなんとなく萌黄と同じ年（？）の少女の声と思えた。

言葉がやけに古めかしいが。

「てかさ、雪鶴。刀つてしゃべれるの？」

『……妖靈もあるまいし…日本刀がしゃべるわけなかろう』

「…じゃああんたは何。」

『…我は、この刀を作った職人らしいのじや。』

……職人？

「女？」

『…そうだな。』

「ますます意味がわからない。」

『…うーむ…そうじやな。』

「うん。」

『我にもよくわからんのじや。』

「意味なつ！」

『…し、失礼じやなー我は具現化すればこんなに綺麗だとこう云う。』

「…こんなに？」

氷美が首を傾げた。

瞬間、日本刀の形が水色っぽい淡い光を放ちながら、人型になつていいく。

水色の光がだんだん弱まり、氷美はまじまじと目をこらした。

「これが、我だ。」

「…雪鶴？」

そこには藍色の髪に水色の大きな瞳を持つた白っぽい着物の少女が偉そうにたつっていた。

?・秘密、過去?（後書き）

なんかサブタイトルと関係なくなってきた気がしますね！

?・秘密、過去?

「…誰?」

「…今我と話していたではないか!なぜ1秒で忘れる!…?」  
その少女は顔を少し紅潮させて叫んだ。  
まさかとは思つけど。

「雪鶴!?」

「遅ーい!…!」

雪鶴のツツコミが入つた。

「だつてわからないもん!人型になるとかあり得ないしつ…!」  
「しゃべり方とか外見とかでわかるじやないつ…?1秒で忘れられた  
のは初めてじや…」

「知らないわよそんなこと…言つてくれないとわかるわけないでし  
ょ!?」

「言わなくとも話の流れ的にそつなる…そんな」とも察する「…」  
できんのか!?」

「はあ!…?できなかつたらなんだつて言つのよ!…?」  
「そんなに馬鹿だとは思わんかつたわ!…!」

全力でにらみあう氷美たち。

朔は目を丸くして(?)、くすくすと笑い始めた。

「何がおかしいつ…!…!」

2人から怒られて、さらに笑う。

「朔、お前…!斬られたいか!…?」

「…やつ、『じめん』『じめん』。ほんと。」

「朔さん?」

「氷美、こいつ斬つてかまわんか?」

「…つー…あんまり良くないかも。」

「ちょっと氷美!…?ちょっと良くないつて何!…?」

危うく斬られそうになつた朔は、笑うのをすぐさま辞める。

「「さて、訳を聞かせてもらおうか?」」

氷美と雪鶴の声がハモつた。

朔は。

誰かを怖いと思つたのは久しぶりだった。

「いや、氷美がね?」

「…私?」

「うん。義姉あねにそつくりで。」

「…朔さんに、義姉なんていتنですか?」

朔についての話は、何も知らない。

萌黄も喋らないし、零は氷美と同じで知らない。朔だつて自ら喋らうとしたのははじめてだつた。

「うーん、まあね。」

「…氷奈のことか?」

雪鶴が静かに言つた。

「氷奈?つて…だれ?」

「…やつぱり氷美は覚えてないか…」

朔が残念そうに笑う。

雪鶴が鼻で笑うが、話しについて行けない氷美は怒れなかつた。

「氷奈義姉さんはね、君の、母親だよ。氷美」

「私の、母親?」

自分の中には記憶。

母の記憶なんて、知らない。

しかも、なんで朔が知つてるの?

困惑した顔を朔に向けると、朔は感情を読み取れない笑顔を浮かべていた。

?・秘密、過去? (後書き)

もういいもん!

サブタイトル変えてやりました

？・秘密、過去？

「なんで、朔さんが知ってるんですか。」「だーかーらー、義姉だつていつてんじやん。」

朔が笑う。

なんか、悔しいんだ。

氷美は自分の母のことを覚えていないのに、朔は知っている。そのことがやけに悔しい。

ふと、氷美は思った。

「あり、てことは朔さんつて…」

「うん。」

「私の叔父に当たる人おーー？」

「うん、そうだねえ。」

「信じたくなーいっ！！！！！」

悔しい上に、自分の叔父だなんて。

朔のとなりで雪鶴が嘆息した。

「落ち着け、氷美。」

「…雪鶴？」

「悔しくなったとこりで、朔の記憶は消えないで。」

「…もしかしてさ。」

「ん？」

「本当にもしかしてだけれど。」

「なんだ？」

「雪鶴も、母さんのこと知ってるの？」

雪鶴は沈黙する。

何も言わない雪鶴を見て、氷美は悟った。

「知ってるんだ。」

「…なぜわかるつーー？」

態度でわかるでしょ、そりやあ。

「朔さんが知つてるのは少し腹立たしいけど…」「ええっ！？ なんで？ 雪鶴はいいの？」

氷美がいつたことに、朔は悲痛な声を上げる。笑うのをこらえて氷美は続けた。

「雪鶴なら、いいや。」「…なんでだ、氷美。」

雪鶴が無表情で問うた。

「だつてさ、母さんも使つてたんでしょ。雪鶴の、パートナーだつたんでしょ？」

氷美の言葉を聞いて、雪鶴がふつと微笑む。

「氷美は、すごいな。」

「…正解つてことね？」

「そ。氷奈は君みたいな人だつたよ、氷美。性格も、全部。」

悲しみから復活した朔が言う。

「私、みたい。」

日本刀 雪鶴を使つていて、性格も似ていて。

「…暴走もした？」

「……………。」

朔と雪鶴がそろつて氷美から田をそらした。

「…母さん…」

自分も同じだけど、少し呆れた。

「うん、だからな氷美。」

「雪鶴？」

「お前が同じように暴走したとき、そんなところまで似なくつて思つたぞ？」

「……似ちやつたよ、母さん。」

母も苦笑しているだらつ。

「あ、でも…。」

「ん？」

「私の中に、なんで母さんの記憶がないんだろ……」  
雪鶴を見て呟くと、雪鶴は少し目を伏せた。

朔も険しい顔つきになる。

「……？」

「氷美、過去の話をしていいか？」

雪鶴の深刻そうな問いにとまどいつつ氷美は頷く。

「少し、つらいかもしないけど。」

朔がそういった。

「つらい……？」

「そうだ。お前は3歳ぐらいいのときだつたしな。」

「……3歳つて。」

微妙な年だが、少しごらい覚えていてもいい年だと思うのに。  
覚えてないということは、それなりに何かあったのだろう。

氷美は一人、息を飲んだ。

\* 雪鶴語り「過去」\*（前書き）

雪鶴が語る（？）氷美の母の時代です。誰が誰だか、わかりますか  
？

「まあ、姫宮様！？木に登るなんて危なすぎます！降りてください。

姫宮は下から見上げてくる侍女に笑いかけた。

「嫌だでさ」

けしきはきれいだから。」

何を言つても動じない姫宮に、侍女はため息をつく

「麗音。落ち着きなさい。」

麗音と呼ばれた侍女は、はつと振り返った。

木の上にいた姫宮は、慌てて飛び降りた。

大英圖書館

「そりなの！ だけど、せつしきかられいねがうるさくて。」

嫌そうには顔をしかめる姫宮

を寄せると、人差し指を一本たてた。

「そんなことをいってはいけないわ、姫宮。麗音だってあなたが怪

だからよけいな心配をかけてはいけないの。

「ちよ、氷奈！？ ばらさないでつていつたのに。」

後ろで麗音が慌てている。

姫宮は不思議そうな目でそれを見、氷奈に向き直つた。  
「うん、わかつたよかあさま。 ねえかあさま、どうしてれいね

はかあさまのことをふつうによぶの？わたしにはけいじをつかうのに。

「もつともな疑問だ。

「…そうねえ…麗音は、私が大変なときに支えてくれた大切な友達なのよ。麗音にはあなたより一つ年上の男の子がいるわ。今度会わせてもらいましょうね。」

「ほんと！？やつたあ！？」

麗音は何度か口を開いたものの、なんていえばいかわからずがつくりと肩を落とした。

「かあさまもおからだがよわいんだからむりしちゃだめだよ。」

なんの脈絡もなくそういう風に注意されて、氷奈は微苦笑を浮かべる。

ふと、そんな様子を見ていた麗音は自分の斜め後ろに人の気配を感じ、武器である鋼糸を装備した。

その人は、振り返った麗音にチラリと一度だけ視線をよこすと、すぐについと顔をそらす。

「…氷奈、この人…だれ？」

「麗音。どうでもいいけれど人を指さすのは辞めなさい指さすのは。

」

氷奈が呆れていう。

それがかんに障った麗音は、震える手を下ろした。

「私の、弟よ。」

氷奈が答える。

「…弟お！？」

「つるさいわね麗音つたら…。」

「…すいませんでしたー…。」

氷奈の弟（？）であるその人に目を向けると、どこもかしこも似ていなかつた。

「義理の弟よ。」

「先に言え！？」

「あいかわらずソソ「ミ体質なのね、麗音…。」

「……初めまして。朔と、いいます。」

その少年、朔は軽く会釈した。

人見知りなんだろうか。

「ちなみに、二十歳よ。」

「どうだつていいわ！」

ふざけて麗音をおもちゃにしていた氷奈は、不意に顔を真面目にして言つた。

「…月夜の、次期リーダーよ。」

「……はあ、月夜の。」

月夜の次期リーダー。

「リーダー？」

「はあつ！？」

「…麗音…。」

「月夜つて、あれですよねあの。」

「そうよ。」

「旦那様の、義賊グループ。」

「ええ。まつたくその通りよ。」

もとをたどれば、氷奈も麗音も月夜の一人だった。

日本刀と、鋼糸を扱う、とても気が合つていて仕事はいつもこの二人、といったかんじの。

氷奈はどこをどう間違えたのか、リーダーである弓弦ゆげんと結婚し、貴族の端くれのような生活をしている。

旦那様というのは、弓弦のことだ。

麗音はそこの侍女。

その、弓弦の弟がこれらしい。

朔：新月のことだ。

弓弦が弓のよいうな形をした月だとすると、結構近いなあと思つ。

「ええ、やつてあげましょ。月夜のリーダーだらうとなんだろうとどんな奴が来ようと手なずけて見せますよもうヤケですけどそれ

がなんですか開き直つて何が悪いんです！…！」

朔が急に饒舌になり、開き直つて話し始める。

麗音は、若干引いた。

「はーはー、落ち着きなさい朔。後で『弦に人の手なずけ方とか教えてもらえばいいわ。』

そういう風に簡単に書いたのもどつかと思つ。

「ははうえー！」

急に後ろから大好きな声が聞こえてきた。

息子の、零。

麗音は振り返る。

「ははうえ、じー」とおわった？

「零ーごめんね、まだなんだけど…姫宮様と遊べるとは思つわ。」

「ひめみやさま？だれ？なんていつこへ…」

「ふふ、冰美ちゃんよ。仲良くなれて？」

「ひみ？つん、わかつた。ひみ、あそぼう？」

零が姫宮の顔を覗き込む。

だけど、姫宮は安らかな寝息を立てながら夢を見ていた。

「…あれー？ははうえ、ひみ、ねむやつてるよ。」

「え、そうなの？」

予想外だ。

さつきからなんか静かだなーとは思つていたけど寝ていたなんて。

「じめんなさいね、若君。」

冰奈が笑いながら謝る。

「わがきみ？おれのこと？」

零は可愛らしく首を傾げた。

「やつよ、零。可愛い若君様。」

「だめだよーおれ、かつこよくなつてひみをまもるんだー！」

「あら、これはまた。」

姫宮の耳元で騒いでいたせいで、姫宮が口をつぶすと開けた。

「つーん…だれ…？」

「あつ、ひみ、おきたの？」

「だあれ？」

「れいだよ。ははうえのところにきて、ひみとあそぼうとおもつた  
んだけどねちやつてたんだもん。」

「れいねのこどもなの？れいって、おんなじはつおんね。」

「うん、おれね、おおきくなつたらひみをまもるんだ！」

「そつなの？じやあわたしはどうすればいいの？」

「うーん、ひみはね…………」

そんな、子供たちの平和な会話を聞いていて、氷奈と麗音は顔を見  
合わせて笑つた。

朔もクスリと笑う。

笑われてきょとんとしていた子供たちも、つられて笑い出す。

今だけの、平和な時間だった。

\* 雪鶴語り「過去」\* (後書き)

長めですが、せりてつづりあるかも知れないです！

\* 雪鶴語り「過去？」 \* (前書き)

少し残酷っぽい表現がありますので、注意してください（^\_\_^）

\* 雪鶴語り「過去？」\*

麗音が、息子の零と一緒に長期休みをもらひて旅行に行っていた間にその出来事が起きた。

姫宮が、冰奈とかくれんぼをしていて隠れた場所で眠つていたときにその出来事が起きた。

朔が、弓弦の元に行こうと思つて家に向かつている姫宮に降参しようつと思つて事が起きた。

冰奈が、いい加減かくれんぼをしている姫宮に降参しようつと思つていたときにその出来事が起きた。

誰も、予測しなかつた出来事だった。

：姫宮がふつと目を開けると、あたりにはある色が広がつていた。

左右どちらにも、その色があつて。

姫宮は何が起きたかわからなかつた。

「…あかい、いわ…」

赤とはまた違う、少し色が濃くなつたよつた色だつた。

呼び方は同じだけれど、何か違う。

これに似てゐる色は、なんだろう。

考えた姫宮は、自分の頬を流れている液体に手を触れた。

そう、この色だ。

血の色の、紅。

：朔は、その光景に瞠目した。

真つ白で綺麗だと思っていた屋敷。

いつも姫宮の声が聞こえてきた明るい屋敷。

今はしんとして、ほのかに紅く染まつてゐるといひがある。

なんだか、これは。  
この光景は。

朔はふらふらとよろけるようにして屋敷に入った。  
鉄のにおいが鼻をさす。

視界に映るのは、紅の色。  
それを見て理解した朔は、声にならない叫びをあげた。  
嘘だ。

どうして。  
どうして

どうして、冰奈が紅く染まっているのか。

…冰奈の身体に、もう感覚はなかつた。

後ろから唐突に訪れた鋭い痛みに、冰奈は声を上げる」とさえかな  
わなかつた。

神経が傷ついたのか、動くこともできない。  
意識はある。

考えるのは、自分の娘のこと。

冰美は、無事だつただどうか。  
隠れままなら、大丈夫だと思うのだが。

なにしろ、子供は妙に聰いところがあるから。

冰奈はそつと微笑んだが、顔の筋肉も動かない。  
微笑んだのを見たものは、誰もいないだろう。

襲つてきたのは、月夜の獲物だつた人達だろうか。

どうやつて調べたのか知らないが、月夜のメンバーがここに集まる。  
そのことを知つて、襲いに来たのだろう。

馬鹿だな、と思う。

そんなことをするぐらいなら、不淨の金を使わなきやいいだけの話  
なのに。

「ちつ、こいつ綺麗な顔だつたのによお…」

やけに悔しそうな声が聞こえる。

うん、怒ったよ？

あんたたちのグループがやつたんだろう？

なのにそこで悔しがるとか馬鹿の極みだね？

「だから最後は、俺がやつてやるよ。」

悔しがつていたそいつは、大きな斧を取り出した。ぶん、と風が唸る音が聞こえ。

氷奈は、意識をなくした。

……麗音は、自分の目が疲れているんだと思つた。いや、思いたかった。

親友の顔はもう見えない。

こんなことになるなら、旅行なんて行くべきじゃなかつた。

無理矢理にでも誘えば良かつた。

零が呆然とその場に座り込む。

いくら幼いとはいえ、4歳だ。

何が起きたかぐらいはわかつてしまつたのだろう。

麗音は、泣いた。

ただ、泣いた。

他にどうしろと書つんだ。

今までずっと、麗音は泣かなかつた。

足を骨折したときだつて、泣かなかつた。

特に氷奈の前では、泣こうとしなかつた。

なぜか意地を張つて、絶対に泣くものかとずっと我慢してきた涙が、

今あふれ出してきたかのように。

「つ……ひなあ……つ……ひなあ……！」

ただ繰り返し、氷奈の名を呼んで。

麗音は、氷奈の亡骸を抱きしめた。

朔、麗音、零の3人は、冰奈の有様を見て言葉をなくした。  
ふと周りを見渡した朔は、一人いないことに気が付く。

「…冰美は…？」

「…いな、かつた。」

朔の問いかけに、零が泣きそうな声で答えた。

「おれ、さがしたんだ。でも…いなかつた。どこにも…」

「…零…」

冰美はまだ3歳だ。

見逃してくれたというのならば、不幸中の幸い。  
でも、零はいないという。

冰美は、どこに行つたのだろう。

「…麗音さん、兄さんがどこにいるか、わかりますか。」

「…弓弦…？」

麗音の声は頼りない。

親友が死んだのだ、無理もない。

ショックから立ち直るのは、そう簡単なものでもない。

「俺を探してんのか？朔。」

「…兄さん。」

後ろから唐突に現れた弓弦に、朔はいらつきを覚えた。

「冰奈が亡くなつたというのに、なんでそう平氣でいられるんだ…！」

思いのままに叫ぶと、弓弦に思いつきリシバかれた。

「だつ」

「馬鹿者。麗音がいる前でそれを言うか？」

はつとして麗音の顔を伺つと、大丈夫、といつよつと微笑まれた。

嘘だと言つことは誰が見てもわかる。

「…すいません。」

「俺だつて平氣じやねえんだよ。」

「…やらものすごく失礼な物言いをしたようだ。」

「で、氷美だがな。」

「…はい。」

弓弦が眞面目な顔になる。

零も麗音も朔も、緊張の面持ちで聞いた。

「氷美は、連れて行かれた。」

最悪の事態。

「そういう顔すんな。氷奈は雪鶴に氷美を任せたみたいだからな。いざとなつたら雪鶴が守るさ。」

「でもつ…！」

「待て。重要なのはこっちじゃない。」

声を上げかけた朔を、険しい顔で弓弦が制した。  
さらに嫌なことがあるというのか。

「氷美は、記憶をなくした。」

\* 雪鶴語り「過去?」（前書き）

投稿がしばらくできていませんでした。『めんなさいっ！』

\* 雪鶴語り「過去？」

「……記憶を、失つた……？」

麗音のぼんやりした声が、やけに大きく響いた。

誰も一言も発することができず、にいたからかもしれない。

「そうだ。あまりにも、キツイ光景だったからな。」

弓弦の苦々しい声。

麗音はキツと顔を上げて立ち上がり、弓弦の頬を張り飛ばした。いい音がした。

「な、……お前……」

弓弦が呆然とする。

弓弦はこれでも、月夜のリーダーだ。

麗音はその部下らしき存在であり、弓弦も張り飛ばされたことなんてなかつた。

でも、それはただの言い訳になる。

「何普通に言つてんのよーあんたがもうちよつと早くあの屋敷に来ていたら、誰も死ななくとも、冰美だつてさらわれなくともすんでもいたじやない！キツイ光景にさせたのも、あんたが遅れてきたからでしょ！？全部、あんたのせいだわ！！」

メチャクチャにまくしたてられた言葉に、弓弦は反論しなかつた。

勢いできたもう一発の平手も、避けなかつた。

自分に、それを受けなければいけない責任があつたから。

「……悪かった。」

その一言で、麗音には十分だつた。

麗音はその場にくずおれる。

わかっている。

すべての責任が弓弦にあるわけではないのだと。

弓弦だつて、好きでそやつた訳じやない。

弓弦だつて、麗音のように周りに当たつてこの気持ちをまき散らし

たかった。

平和な日々は、いつまでも続くものじゃないのだと。  
この光景が、物語つていた。

「…おれ、さがしにいく。」

また静まりかえった中で、零は呟くように言った。  
幼い心で、決意したあのことを、守れなかつた。

『ひみをまもるんだ!』

悔しさ。零の感情はそれ一つ。

自分の非力さに腹が立つ。

「零…」

朔がためらいがちに声をかけた。

「さくにいちゃん、とめないでよ。」

「…止めるに決まってるだらつー!」

「だめなんだ!」

零は自分に言つように叫んだ。

「だめなんだ。ここでおれがいかなないと、おれはいつしょひみを  
まもれなくなる。… そんな、気がする。」

弓弦がふつと笑つ気配がする。

なんか馬鹿にされた気がして、零は弓弦を正面から見た。  
目が合う。

「おれは、なにをいわれてもいくからな。」

宣言した。

「ふむ。譲る気はなさねうだな。」

弓弦は腕を組み、面白そうに零を見た。  
そして、朔に呼びかける。

「よし、朔!」

「…はい?」

「お前、今から月夜のリーダーな。」

間。

「はあつー？」

「つるせーな。零がやるつて言つてんだ。零は月夜の鋼糸使いにな  
る。」

「な、でも……！」

「でもじやねーの。こいつが氷美を守る手だてはそれしかねえ。」

「教える人は……！」

「私。」

麗音の落ち着き払つた声。

だいぶ落ち着いたのだろうか。

「でしょ？」「弦。」

「当たり前だ。」

どんどん進んでいく新・月夜の話に、朔は慌てた。

「あ、当たり前つて……そんな、すぐ覚えられる訳じやないんだし……！」

「大丈夫だろ。零は手先が器用だし、もちろん俺たちだつてついて  
くさ。」

弓弦がにっこり笑う。

朔の背を冷や汗がつたつた。

月夜：大丈夫なんだろうかこんな調子で…  
零がたたつと駆けてきて、弓弦の服の裾を引っ張る。

「ゆづるおじさん！ー！」

「お？」

「ゆづるおじさんつていいやつだなー！」

「…あー、まあ、な。」

歯切れの悪い声に、朔は笑いをこらえるのが精一杯だった。

\* 雪鶴語り「過去？」（後書き）

雪鶴が語っている気がしないと「うしづ ハリはナシでお願いします。ちなみに、雪鶴は氷美と一緒にいますので。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3360z/>

---

狐の面は月見て笑う

2012年1月5日18時49分発行